

【研究ノート】①

作家論：“好き”を仕事にする

永井秀樹の初一念とイラストの魅力

学芸員 曳地 真澄

序

永井秀樹は、昭和 49(1974)年静岡県御前崎市出身のイラストレーターである。現在、歴史関係、ミステリー、官能などの分野で活動しており、代表作に、新聞連載小説『家康(不惑篇/知命篇/飛躍篇)』(安部龍太郎著)の挿画や、『江戸川乱歩語辞典』(奈落一騎著・荒俣宏監修、誠文堂新光社)の挿画などがある。

島田市では、諏訪原城ビジターセンターや、島田市文化芸術推進計画へのイラスト提供などの仕事を依頼したことがきっかけとなり、令和 2年度第 85 回企画展「歴史イラストレーター 永井秀樹 一戦国武将と剣豪を描く一」を開催する運びとなった。

情報社会が円熟した現在、イラストレーター本人や関係者によるホームページやソーシャルネットワークサービスでの発信もあるが、依然としてイラストレーター自身について知る機会はそれほど多くない。本展では、永井秀樹のイラストの仕事を紹介するのみならず、イベントなどを通して普段明かされない制作の話を多く伺うことが出来た。

本稿は、企画展を開催するにあたり作家本人から伺った話と、令和3(2021)年2月 20 日(土)(13:30～15:00)に行った関連イベント「講話・実演 イラストレーターのお仕事 裏側を聞く/見る」などを、まとめている。そのなかで、永

井のイラストを、オリジナルの作品と、仕事の依頼を受けて描いた作品に分け、それぞれの特徴を検証し、永井のイラストの魅力を探った。

なお、併出の拙稿・研究ノート②「記録：イラストレーター永井秀樹の飽くなき情熱と新聞連載小説『家康(不惑篇/知命篇)』挿画の制作秘話」では、令和3(2021)年2月 20 日に行った関連イベント「講話・実演 イラストレーターのお仕事 裏側を聞く/見る」にて披露されたイラスト制作の実演をまとめることにより、デジタル技法とアナログ技法¹を交えた永井のイラスト制作の過程や、イラストレーターの仕事をするための精神論やプロの矜持などについて言及している。

(1)デビューまでの道のり

永井は、幼少期から絵を描くことが好きな少年であったという。幼稚園に通う頃から、昼休みには外で遊ぶよりも 1 人で絵を描いていることが多く、子供の頃から「将来は大好きな絵を仕事にしたい」という夢があった。しかし、幼いころは好きな絵を描き続けた先にどんな仕事に結びつくのか、はっきりとした将来像は見えなかったという。幼少のころは画家か漫画家ぐらいいしか絵にかかわる職業を知らなかったため、漠然と「画家か漫画家になりたい」と考えていたそうだ。中学校を卒業後、島田学園高等学校(現島田樟誠高等学校)に進学し、御前崎市から島田市まで、電車やバスを乗り継いで片道2時間ほどの距離を毎日通学したという。永井にとって島田市は、多感な高校時代を過ごした場所である。本屋に寄り道したり、駅前でおやつを購入して小腹を満たしたり、青春時

¹ 本稿では、紙や筆やペン、絵の具や墨など従来の支持体や道具を駆使した描画を「アナログ技法」とし、パソコン上での描画を「デジタル技法」とする。

代を過ごした思い出深い土地だと語っていた。

永井は高校卒業後、平成5(1993)年、東京デザイナー学院に入学し、インテリアデザインを学ぶ。二十歳の頃、通っていた専門学校の寮友から「イラストレーターを目指す」という夢を聞き、永井は初めてイラストレーターという職について認識したそう(図1)。友人から雑誌の挿画や本の表紙など、世に出ているイラストレーターの仕事を見せてもらった時に、永井は「自分がやりたかった仕事は、イラストレーターである」と直感したという。イラストレーターという明確な夢ができ、専門学校を卒業後、絵を描く仕事を探し求めたが、就職難の社会情勢もあり、すぐに絵の仕事につくことはできなかった。そのため、地元静岡県に戻り、10年間は普通の会社勤めのサラリーマンとして慎ましく生活することとなる。しかし、その胸の奥底に赤く燃える「いつか絶対に東京に出て、絵の仕事をしてやる」という野望が消えることはなかったという。会社員時代には、創作活動の刺激を求めて月に何度か上京し、ギャラリーに足を運び、展覧会を見て、業界の第一線に後れを取らぬよう努力し続けた。ギャラリーなどで行われるイラストレーターの展覧会に足を運び、本人に直接会って話を聞き、イラストレーターという仕事についての理解を深めていった。当時はまだインターネットが普及していないため、情報を得るためには、現地に足を運ぶことが不可欠であったと、永井は振り返る。

会社員時代、パソコンによるデジタル技法でのイラスト制作にも挑戦するようになる。パソコンとプリンターとスキャナーを一度に全部買い揃えた時に、おまけで簡易版のPhotoshopが附属してきた。その時は、まだ「Photoshopは写真や画像を編集するもの」という程度の認識しかなかったという。実際に機器を動かして、

アナログで描いた過去の絵を次々にスキャニングし、パソコンに取り込んだものをPhotoshopで自由に色を変えて遊ぶうちに、その面白さにだんだんと惹かれていったそうだ。たまたまダンボールに描いた過去の作品が手元にあり、それをスキャナーで取り込んでPhotoshopで着色を施したら、浮世絵版画のような古色やざらつきが生まれ、とてもいい雰囲気に仕上がったという。この時に発見したダンボールへの描画が、のちの永井の歴史イラストレーターとして、他の追随を許さぬオリジナリティの高い独表現につながってゆく(図2)。

永井は、平成13(2001)年より通信制の講談社フェーマススクールズを受講し、会社員をしながら本格的にイラストを学ぶこととなる。20代の頃に描いた落書きのようなイラストは、直感的に創造されたものが多いという。年齢を重ねてからは再現することができないパワーとあそび心にあふれており、「このころのアイデアノートに描かれたイラストは、宝物のように大切なものである」と、永井は慈しむように語っていた。

永井は30歳を機に勤めていた会社を退職、イラストレーターを目指すため単身上京し、ようやくスタート地点に立つこととなる。しかし、東京に出たものの、仕事のあては何もない。今まで描き溜めたイラストをA4サイズに印刷したものと、自分を売り込むための企画書をはさみこんだ作品ファイルを何十冊と作り、それを武器に毎月5~10件ほどのさまざまな出版社に営業をかけたという。地道な営業活動ののち、初めて携わったイラストの仕事は、雑誌「Tokyo Walker」(平成18(2006)年2月発行)にて、東京・池袋・浅草など東京の街を描く依頼であった。最初のアポイントメントでは7点のイラストの依頼であったが、実際に担当者と打ち合わせをした結果、イラストの枚数が17枚に倍増し、

それを納期4日で仕上げるという厳しいオファーとなった。当時、永井は週5日のアルバイトで生計を立てており、その中で17点の依頼というのは時間が足りず大変厳しいものであった。だが、初めてのイラストの仕事のオファーを断ったら、この先、仕事の依頼は来ないだろうと覚悟を決め、4日間の制作期間のうち2晩徹夜をして17点全てを仕上げ、永井はイラストレーターとしてのデビューを果たしたのである。最初に厳しい条件下での仕事を乗り切ることができたというのは、後のフリーランスのイラストレーターとしての自信にも繋がったという。

(2) オリジナルのイラストについて

現在では、多くの時代小説や歴史系のイラストの仕事を受ける永井であるが、最初から歴史系のイラストを得手としていたわけではないそうだ。もともと、歴史に興味があったことから、歴史上の人物などのイラストにも取り組んでいたが、最初のうちは、自分が描きたいイメージに対して描画の技術が足りず、描きたいものを描くことができなかったという。

ここで、2点のオリジナル作品を例に、永井のイラストの魅力を探っていく。オリジナルの作品とは、クライアントからオファーがあり描かれたものではなく、永井自身が己の欲求により描きたいものを描いたイラストを指す。

まず、図3は歴史上の実在の人物、久坂玄瑞くさかげんずいを描いたイラストである。久坂玄瑞は幕末の長州藩士で、松下村塾で吉田松陰に学び、松陰の死後、その遺志を継ぎ、尊王攘夷運動を行った。図3の作品は、久坂玄瑞が命を落とす禁門の変(蛤御門の変)の前、天王山にて出陣の時を待つ、一瞬を切り取った作品である。

血気はやった長州藩士のイメージとは異なり、雲立ち込める満月の夜に、久坂は戦装束

を身に着け、右手で数珠を持つ祈りの姿で、じっと何かを見つめており、大きく息をして心を落ち着かせている、そんな息遣いさえも伝わってくるようなイラストだ。禁門の変は、2万とも3万ともいわれる各藩連合の幕府軍に対し、長州軍は2000人に満たない圧倒的な劣勢のなかで行われた戦いであった。このイラストから、日本の未来を憂い、長州藩のために尽くし、25歳の若さで日本の未来のために散華した儚くも美しい久坂の生き様が感じられる。戦いを目前に控えた久坂が、何を見つめ、何を祈り、何を想い、心を静めていたのか、時代が動く幕末の熱気と久坂の心の静けさが対照的な一作である。

次に紹介するのは図4《丹下左膳たんげさぜん》である。丹下左膳とは、林不忘はやしふぼうの小説に出てくる架空の剣豪であり、右目右腕がない独眼隻手の異様な容貌も相まり、独創的なキャラクターとして不動の地位を築いている。その人気は時代を超えて、幾度も時代劇や映画が制作され、往年のいぶし銀の俳優たちが丹下左膳役を演じている。永井の描く図4では、ぽっかりと明るい満月を背に、低くかまえる丹下左膳が、ニヒルな笑みを浮かべてこちらを凝視している。半身に構えたこの角度では、失った右腕をどのようにカバーしているのかは想像するしかないが、左手の刀は半分以上鞘から抜かれている。少しでも隙を見せれば、素早い抜き打ちの一撃を食らいそうな、息をのむ迫力が感じられる。この1枚の作品に描かれているものは最小限で、低い空に浮かぶ満月と、月光に照らされた丹下左膳、そして背景にススキのような草が少し生えているだけである。このシンプルな構成の作品から、夜半の静寂とささやかな夜風、そして異形の剣士が放つ極度の殺気と緊張を感じることができるだろう。

図3《久坂玄瑞》図4《丹下左膳》の2点は、展覧会では、永井のオリジナルイラストに焦点を当てた第三章：真髓～命の刹那を描くオリジナルの作品～にて展示をした²。イラストに描かれた人物は、歴史上に実在した人物でも、小説の登場人物でも、その人生のうち、かっこいい一瞬が切り取られて描かれている。しかし永井は、かっこいい瞬間以外の、しぐさや生活にも意識を向けて、イラストを描いている。例えば、意中の女性の前で緊張したり、ご飯を食べこぼしたり、イラストに描かれない一面にも思いを巡らせることで、より複層的で豊かな人間味を帯びたイラストに仕上げている。オリジナルの作品は、クライアントからの意図が入らない分、描かれた人物が過ごしてきた時間の重みや生き様など永井が熟考したドラマが、より色濃く表出しているといえるだろう。

永井は、ダンボールに描いた線画をスキャニングしてパソコンに取り込み、ダンボールの表面に表出する波打ちを活かしてデジタル技法で加工をすることにより、浮世絵版画の木目や摺り跡のような質感を出すことに成功している。浮世絵とは、江戸時代から明治・大正ごろにかけて、木版印刷の技法によって制作された版画で、描かれた被写体は人物や風景、実際の事件や空想の世界など、多岐にわたる。浮世絵をよく見ると、版木の木目が浮き出ているようなものがある。図4《丹下左膳》の背景にも、ダンボールの表面にわずかに出る波打

ちが効果的に残されており、浮世絵の木目や刷跡の質感に似た表現になっている。加えて、ダンボールの波型の中芯が筆に引っ掛かることで、独特の揺らぎがある筆致が生まれ、木版の顔料のにじみのような効果を出し、永井の作風にオリジナリティと味わい深さを出している。

永井作品と浮世絵の類似関係をもう少しわかりやすく説明するために、参考作品を紹介する。幕末から明治期に活躍した浮世絵師・^{つきおかよしとし}月岡芳年が晩年に仕上げた《^{つきひやくし}月百姿》という100枚におよぶ浮世絵の連作がある。月岡芳年は最後の浮世絵師とも呼ばれ、彼が晩年に手掛けた《月百姿》は、幻想的な儚さや美を併せ持った様々な場面がドラマチックに描かれ、見る者の感情を激しく揺さぶる力があり、現代でも多くの人に愛されている。図5《^{ときむね}月百姿 雨後の山月 時致》(月岡芳年)は、日本三大^{あだう}仇討ち³に数えられる「曾我兄弟の仇討ち」に登場する曾我兄弟の弟・曾我五郎時致が、父の仇討ちをする場面を描いたものである。曾我物語は兄・曾我十郎^{すけなり}祐成と弟・曾我五郎時致が、苦節18年を経て、父・^{かわづさぶろうすけやす}河津三郎祐泰を暗殺した父の^{きゆうてき}仇敵・^{くどうすけつね}工藤祐経を殺し、仇討ちを果たす物語である。この図5に描かれた弟・時致は、体が大きく勇ましい武者姿で、抜き身の太刀をだらりと下げ、袖をまくっている。仰ぎ見る空には、雲間に見え隠れする三日月と、ホトギスが羽ばたく姿がある。曾我兄弟の仇討ちは雨夜に行われたが、この浮世絵には

² 展覧会は、第一章：興隆～新聞連載小説『家康』の世界～、第二章：泰然～イラストレーターとしての仕事～、第三章：真髓～命の刹那を描くオリジナルの作品～、第四章：秘奥～原画と過去作品から見る永井秀樹の源流～の順で展示した。詳しくは、拙稿・研究ノート②「記録：イラストレーター永井秀樹の飽くなき情熱と新聞連載小説『家康(不惑篇/知命篇)』挿画の制作秘話」(1)島田市博物館での展覧会を参照。

³ 日本三大仇討ちは、「赤穂浪士の討ち入り」「伊賀越えの仇討ち(鍵屋の辻の決闘)」「曾我兄弟の仇討ち」と言われている。(異説あり)

「雨後の山月」とあるため、明け方近く仇討ちの終盤の場面であろうか。ホトギスは「時鳥」^{ほとぎす}「子規」^{ほとぎす}など様々な漢字が当てられるが、中国故事より「帰るにしかず(帰りたけれど帰れない)」という意味がある「不如帰」^{ほとぎす}と当てることがある。力自慢で荒くれ者の弟・時致が、仇討ちを果たした後、凶刃に倒れた兄・祐成を想い、残党たちとの最後の戦の前に悲しみを振り切って腹に覚悟を決めた一瞬の姿を、切り取ったかように感じられる。時致の熱く燃えたぎる心の内と、月夜の静寂が対照的で、もう後には戻れない、気高く切ない覚悟が作品から感じられる。

永井の描いた、図3《久坂玄瑞》および図4《丹下左膳》も、図5《月百姿 雨後の山月 時致》と同様に、月夜を舞台に描かれている。月夜の場面のみならず、作品から感じられる物語の広がりや複雑で繊細な心情描写まで、細やかに気を配り仕上げている点も、類似していると言えるだろう。

(3) イラストレーターの仕事として手掛けるイラスト

永井の仕事を最も身近に感じられるもののひとつとして、書籍や雑誌の表紙絵や挿画の仕事が挙げられる。制約なく自由に表現を行う芸術家やアーティストとは異なり、イラストレーターには、クライアントの目的や想いを汲み取り、それをイラストとして表出することが求められる。ここでも、3点の作品を例に永井の作風の一部を紹介する。

まず、表紙絵の仕事の中では、「主人公を、とにかくかっよく、購買者が思わず本を手にとってしまうような、イケメンに描いてほしい」という依頼が最も多いという。展覧会でも紹介した図6『御刀番左京之介 小夜左文字』^{おかなぼんひだりきょうのすけ きよさもんじ}(藤井邦夫著、光文社)なども、その類に入るといえよ

う。この小説は、架空の駿河国^{しおぎき}汐崎藩の御刀番・左京之介が、様々な名刀とそれにつつまる様々な謎や問題に切り込んでいく、1冊読み切りのシリーズ作である。表紙絵に起用された永井のイラストは、上背があり端正な顔立ちの主人公・左京之介のかっこよさを的確に描いており、目につきやすく、書店にて思わず手に取ってしまう読者が多くいることだろう。御刀番左京之介シリーズ全 11 冊を俯瞰すると、刀を抜きつけた時、切り下した時、心が落ち着いている時、感情を高ぶらせている時など、主人公の様々な姿を並べて見ることができ、読者はより主人公の正義感に熱い人柄を鮮明にイメージすることとなるだろう。

このような人物がメインとなるイラストを描く場合、永井自身がモデルとなり、イラストに必要な資料を用意している。例えば、着物を着て、刀を抜きつけているイラストを描きたい場合、永井自身が着物を着て、腰帯に模造刀を挿し、抜きつけたポーズをとり、写真や動画を撮影してイラストの資料にする。

永井の作品の特徴の一つに、アニメや漫画の作画のような、極端なデフォルメや過激な演出などが無く、鑑賞者が無理なくイラストを受け入れられることが挙げられるだろう。図6『御刀番左京之介 小夜左文字』は、抜きつけて斬り上げる様子がリアルに描かれている。半身に構えた上半身に、裾のはためきで一刀必殺の速さと迫力が増している。この「御刀番」シリーズの表紙絵をはじめ、先述の図4《丹下左膳》も、そのほかの作品の剣豪たちも、実際の刀の扱いにかなり忠実で、日本刀の長さや反り、柄を持つ手の内の表現に至るまで不自然な描写がない。きちんと丹田に力が入り、重心を低く腰を入れた、気持ちのいい剣士のたたずまいを見ることができるのは、大きな魅力で

ある。永井の作品の人体のリアルさは、想像で描かず、生身の肉体を見て描かれるところに裏付けされるといえるだろう。

一方、図7・8『十手長屋物語一・二』(坂岡真著、角川春樹事務所)を例に見ると、この表紙からは主人公の顔立ちや表情を読み取ることができない。なぜなら、この表紙絵は、「主人公の顔は、読者の想像に任せるようにしたい」というクライアントからの要望のもと描かれているからである。この小説は、江戸時代、岡っ引きの六兵衛が「どろぼう長屋」に住む一癖ある住人たちと活躍する、捕物帳の連作である。この表紙絵からは、べらんめえ調の江戸の住民が自由に往来を行き交う街の空気感や、そこを主人公・六兵衛がぶらぶら歩く様子など、豊かな物語の世界感が感じられる。読者のイメージを膨らませ、小説に色を添えるにふさわしい表紙絵であるといえるだろう。永井はプロを目指す過程で、人物だけではなく、風景も描けるように研鑽を積んだという。それは前述の「Tokyo Walker」の仕事でも活かされており、その後の書籍表紙の仕事でも、風景を描く技量が遺憾なく発揮されていることがうかがえる。このような魅力的な風景のイラストは、平成18(2006)年の初個展「東京浪漫」(GALLERY HOUSE MAYA・東京都)にて発表されている。(そのうち、8点は本展覧会でも展示された。)(図9・10)

また、令和2(2020)年には、『江戸川乱歩語辞典』の挿画を一举に手掛けている。ミステリーの分野における艶麗で官能的な表現は、歴史と共に永井が得意とするジャンルである。担当編集者が『江戸川乱歩語辞典』の挿画のイラストレーターとして永井を推薦し、携わることになったという。永井自身も江戸川乱歩の世界のファンであり、挿画の依頼が来たことを非

常に喜ばしく感じているようだ。永井の手にかかると、女性のイラストも、表面的なかわいさや美しさだけではなく、妖艶さが加わり、ミステリーの世界観にふさわしい、内側から薫り立つような色気や魅力が感じられる。図11《野末秋子》のような女性のイラスト制作の際にも、永井自身がモデルとなり、女性になりきって、しなりをつくり、イラストの資料を作っている。図12《黄金仮面》を描くときは、布のはためきを再現するために、家族総出でモデル撮影を行ったという。永井自身がマントを身に着け、勢いをつけて下にしゃがむときに、永井の妻がアシスタントとしてマントをひらめかせ、理想の布の動きが出るまで、何度も資料撮影に挑んだ力作だ。

(4) 考察とまとめ

本稿では、永井のデビューまでの道のりと、オリジナルのイラストの魅力および仕事の依頼を受けて描いたイラストの魅力を、それぞれ紹介した。永井のイラストは、狂いのない人物描写と、人の営みを印象付ける風景や街並みの高い描画力を元に、描かれる人物の背景にある物語に対して隅々まで意識を行きわたらせることによって、他の追随を許さぬ圧倒的な魅力を持ったものとなっている。その根幹には、浮世絵などの日本の伝統的な表象文化への畏敬の念がある。

本稿では扱わなかったが、永井は歴史雑誌の挿画も多数仕上げている。歴史雑誌の購読者は、「歴史が好き」という共通項のもと、男女問わず、小学生から高齢者まで、ターゲットの属性が広いことに特徴があると言えるだろう。永井自身の身体をモデルにした描画は、関節の可動部や服のしわや布のはためきに非現実的な無理がない。加えて、漫画やアニメで使

用されがちな、過度なデフォルメや極端な演出がなくとも、味のある筆致や古びを想起させる色遣いにより、印象に残る仕上がりになっている。永井の挿画は、多様な読者それぞれが思い浮かべる歴史上の人物のイメージを崩さぬまま、一様にかっこいいという印象を抱かれるものとして、洗練されているといえるだろう。ただ眉目秀麗なだけではなく、その生き様に真に迫る、永井のイラストに魅了される編集者や読者は後を絶たない。